



こーひーぶれいく

## ボヘミアン・ラブソディを 観た

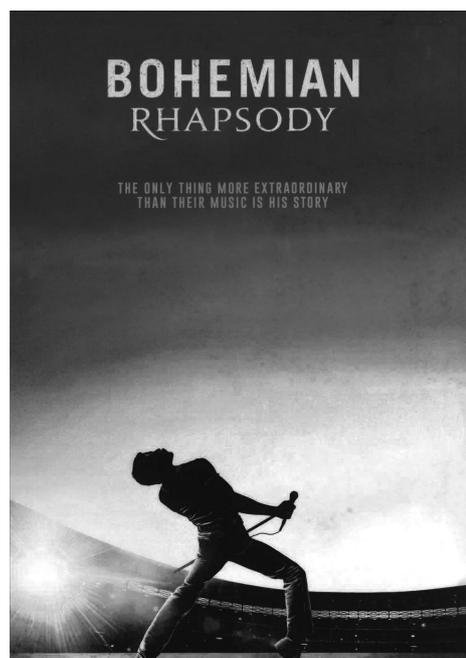
吉村 真奈

Yoshimura Mana

2018年末から2019年にかけて大ヒット中の映画、ボヘミアン・ラブソディを観た。ストーリーは一部フィクションだそうだが、インド系移民という複雑な出自と容姿へのコンプレックス、宗教的背景とそれに反するような性的指向、そしてエイズ。富と名声と迫害と偏見の中で生き抜いたフレディ・マーキュリーの物語である。伝記映画としても音楽映画としても中途半端であると酷評される一方、日本では50歳以上の「母親世代」が成人の子供と出かけて号泣するという社会現象も起きているようだ。

事実私の子供達は、彼ら世代の大ヒット漫画『ジョジョの奇妙な冒険』の中で多用されていることや、未だにCM等でその楽曲を繰り返し耳にすることからクイーンをよく知っているし、またフレディを何の違和感もなく受け入れている。フラットで偏見がない。一方私の世代は、純粋なクイーンの支持者もたくさんいたが、一方でゲイだ、エイズだと揶揄してひとくくりに『えんがちょ』みたいな切り捨て方をした者も多かった。彼がエイズで亡くなった時も『それ見たことか』みたいな風潮も多分にあった。映画のなかでは彼の心情について深く描かれてはいないが、しかし当時の我々世間のありようを思い出すとずいぶん残酷であったと思う。筆者にとっては単に『キモい…』だけのクイーンであったが、それぞれの立場で懸命に生きてきたのだという感慨と、断罪に対する慚愧の念、そしてクイーンの音楽を大音響で聞くというお膳立てもあって、ご多分にもれず号泣に至った。『今時の子供ときたら…』と愚痴をこぼす大人になったものの、よほど当時の自分の方が恥知らずであったと思う次第だ。

日本でもエイズパニックはあった。HIV陽性者や



©2018 Twentieth Century Fox Film Corporation.  
All rights reserved.

エイズに対する差別や偏見は大変なものであった。ただ単に無知であったという以上に、薬害HIV感染を隠蔽したいという事情とあいまって、性感染症としてのHIV感染は悪質なまでに排斥された。その後、血友病患者でHIVに感染している人は「HIV感染者数」「エイズ患者数」の統計的な数字のなかには含まれず、エイズ動向委員会で報告されるのみという奇妙な決着をつけた。国の政策として『良い』HIV感染と『悪い』HIV感染を切り分けて考えるというのはいかかなものであったであろうか。因果応報・自業自得だという日本人的な発想はそろそろ慎むべきだ。ことに医療現場では、西洋では、川に落ちた人にその理由を聞くよりまず助けろという話がある。すなわち人の不幸に先ず寄り添う。喫煙、飲酒、薬物等の依存症に対して、我慢できない方が悪いと断罪するよりはとにかく治療。そして予防的配慮・社会構造の見直しが必要であるということになるだろう。

フレディが亡くなって30年近く経とうとしている。私たちはいまLGBTだ、ダイバーシティだと声高に叫んでいるものの、なかなかその壁を越えられずにいる。30年後に今度は孫娘とこの映画を観たい。『随分とお粗末な価値観だったのね』と啞然とされるような未来を切望する。

(東京医科大学放射線医学分野)